

資料室だより 90

新刊紹介：

Von Johann Sebastian Bach bearbeitete Werke; Giovanni Pierluigi da Palestrina, Missa brevis(Stuttgarter Bach-Ausgaben, Serie C:Supplement)

9月に行われた合唱ワークショップで用いられた楽譜が資料室に寄贈されたのでご紹介したい。しかしこのタイトルを見て、「いったい何だろう？」と戸惑われた受講生もいたのではないだろうか？パレストリーナの「ミサ・ブレヴィス」をバッハがアレンジしたもの？と思われたかもしれないが、そうではなくパレストリーナの原曲は「シネ・ノミネ」である。バッハは言うまでもなくルター派なので彼にとってミサ曲は、キリエとグローリアの部分だけを作曲した小ミサがルター派の典礼では用いられる。ゆえにパレストリーナのミサ曲からバッハはキリエとグローリアだけをとっている。この作品を、シュピッタはすでに知っていたそうだが、未出版のままでノイエ・シュミーダーのアンハングにすら出てこない作品である。新全集にも当然ないのだが、**Stuttgarter Bach Ausgaben** が **Supplement** として10年以上も前に出版していた。

バッハがヴィヴァルディなど他の作曲家の作品を編曲していることはよく知られていることだが、パレストリーナのミサ曲をも、というのは意表をつく事実である。ローマ教会の権化のような作曲家がローマ・カトリック教会のために書いたミサ曲をルター派の第5の福音史家とまで言われるバッハが取り込んだのである。校訂者 **Diethard Hellmann** によると1740年ころの初演で、ライプツィヒのトマス教会か、ニコライ教会での礼拝式のために演奏された可能性がある。バッハはローマ・カトリックの精神で作曲されているミサ曲を学び（彼の *bearbeitung* の意味はそこにある）、それをルター派の教会で荘厳に響かせようとしたということである。音楽はパレストリーナそのままである。バッハはそこに器楽パートを効果的に書き加え、通奏低音を書き込んでいる。後期ルネサンスと通奏低音様式は連続性があるので、この数字付き低音は何ら違和感を感じさせない。

西脇純：「グレゴリオ聖歌研究（5）～主の降誕 日中のミサの入祭唱 Puer natus est の理解によせて～」（南山神学 36号）

グレゴリオの家の本科生でもあられた西脇師によるグレゴリオ聖歌の論文。アンブロジウスなど教父神学の聖書解釈の脈絡のなかでグレゴリオ聖歌のミサ固有唱を論じておられる貴重な論考である。

杉本ゆり記